

房総の 文化財

VOL. 12

ISSN 0910-0848
Bosō no bunkazai

平成9年1月6日

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850



発掘調査速報

中世の屋敷と墓地 ～東金市前畑遺跡

前畑遺跡は、千葉東金有料道路と国道126号線（東金街道）が東金市で合流する地点のすぐ近くの北側台地上に位置します。東金有料道路を松尾町までのばす工事のため一部を調査することになりました。遺跡は、調査区の南側に生活の跡が集中し、奈良～平安時代（この遺跡では8世紀～9世紀が中心）の建物の跡約50軒、縄文時代の家の跡、埋甕（埋められていた大きな土器）などがみつかります。



またそれらとは別に、中世の室町時代から戦国時代にかけて（この遺跡では15世紀後半～16世紀後半が中心）の墓地と屋敷跡の一部が見つっています。墓地は調査を開始してすぐに、地中から墓石などがいくつかとまって見つかったために、その下に墓地があることがわかりました。約25m×12mの範囲に土葬の墓穴約100、火葬した跡約20の計120がとまって、複雑に重なりあって掘られています。土葬は遺体をそのまま土の中に埋める方法ですが、埋めるときにひざを折り曲げ腕を抱かせるようにして右側を下にして、横向きに寝かせて埋めたものが多く見られました。一方火葬は、遺体を火で焼いて骨にしてから埋める方法ですが、空気の通り道を作るためにトンネルを掘り、穴の中に木やわらを積みその上に遺体を置いて焼いたものです。そして焼き終わると、そのまま土をかぶせて埋めてしまうという方法が多くみられました。これらの墓穴からは人骨と銭（おかね）が多く見つかり、残りが良くて骨の状態が良くわかるものがありました。また、火葬の跡の中では、焼け残った中国製の焼き物の小皿（白磁）、髪の毛をと



かす簞、銭類が見つかった穴もありました。銭は死んであの世に行くときに渡ると言われる川（三途の川と呼ばれています）を渡るのに必要な通行料と考えられています。これらの墓地は室町時代の村の共同墓地とみられます。

一方、室町時代～戦国時代にかけての屋敷の跡とみられる堀が見つっています。堀は幅約4～5m、深さは約1.5mでV字型に掘り込まれ、長さは調査分で約100mあり、さらに調査区の外にのびてい

ます。建物の柱の穴やほかの穴も少しみつかり、これからの調査によっては屋敷跡の全体がはっきりしてくるかもしれません。堀は使われなくなっから埋められています。

収蔵遺物コーナー

小さな仏像 ～八日市場市大堺・塔ノ前遺跡



八日市場市の横須賀城跡近くの大堺・塔ノ前遺跡から江戸時代の遺物といっしょに高さ4.45cmの小金銅仏が見つかりました。この仏像は左手の一部が欠けていますが、鎌倉時代に作られた物で、お釈迦様を守る四天王の一人である持国天であることがわかりました。仏像は右手を腰に当て、左腕は横にあげていて、手には戟（中国古代の武器の一つ）を持っていたようです。四天王とは仏教の世界の中心にそびえ立つ須弥山の中腹に住み、それぞれ東を持国天、南を増長天、西を広目天、北を多聞天が守護します。仏教の寺院では通常本尊を中心として、四隅に配置されます。そのうち持国天の仕事は国土を

護持し（守り）、人々に安らぎを与えることであり、そのため持国天と名づけられました。この、小金銅仏はその大きさからいって寺院などの本堂で用いられたものではなく、寺の僧侶がふだん生活する部屋に置かれたり、かんたんなお堂の本尊であったり、仏間に置かれ仏様とされていたようです。また、武将が髪に結びつけたり、兜の中に納めた例や、旗の先につけたとか、お守りにしたという伝承を持つものもあります。

この小金銅仏は、当時の城や寺院に生活していた人々の仏教への思いを示す貴重な資料とい



えます。

千葉県内の最新出土考古資料の大集合展「地中からのメッセージ」開催中
成田市南羽鳥中嶋遺跡出土「人頭型土製品」他20遺跡約800点展示

遺跡今昔物語

いっぽんの道から～県道成田安食線物語

私たちの生活に道路が欠かせないものであることは言うまでもありません。道路の多くは昔から使われ、しだいに道幅を広げ整えられ今にいたっていますが、高度経済成長期の1960年代ころから地図にはまったくなかった道路が計画的につくられるようになりました。その一つがここに紹介する県道成田安食線と呼ばれているバイパスです。成田市寺台から印旛郡栄町安食までをつないで、新東京国際空港や成田ニュータウンなどへの交通量を調節するためにつくられました。計画された道路の下にはたくさんの遺跡があることがわかっていましたから、道路を建設する前に発掘調査が行われました。調査された遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの12遺跡です。

このなかで上福田13号墳は、写真のような貝の化石がまざった石でつくられた石室（遺体を納める部屋）が発見され、たいへん重要な古墳であることがわかりました。そのため、工法を変えて石室は残されました。

他にも奈良時代を中心とした郡役所などの貴重な遺跡も見つかりました。道に沿って簡単に紹介してみましょう。

上福田保町遺跡

縄文後期（約4,000年前）に一時人々が住む。

古墳時代に家が1軒つくられ、カマドの神様におはらいをします。

仲兵衛遺跡

縄文早期に人が訪れる。縄文後期に一時人々が住む。

奈良時代に家が1軒つくられる。

下福田稲荷原遺跡

縄文早期に人が訪れる。縄文後期に小さなムラがつくられる。

平安時代に家が建てられる。

江戸時代（1603～）に近くに住む人々が土を盛って、庚申塚をつくる。

大畑遺跡から上福田13号墳までの周辺には竜角寺古墳群・上福田古墳群など一辺が86mという日本最大の方墳（岩屋古墳）を含む140基以上の古墳がつくられる。

上福田13号墳

古墳時代の終わりに都の豪族と関係の深い人々が四角い古墳をつくる。

松崎播磨遺跡

古墳時代の終わりとから平安時代までときどきムラができる。

鳥内遺跡

縄文中期・後期にムラができる。

古墳時代から平安時代までときどきムラができ、にぎわう。



現在の土福田13号墳付近

向台遺跡

古墳時代（この遺跡群では7世紀から）から平安時代（西暦794年～）まで役所の隣町としてたくさんの人々が集まり、掘立柱の建物もつくられる。

大畑遺跡群

古墳時代の終わりとから平安時代まで郡の役所が置かれ、大きな掘立柱の建物が並ぶ。たくさんの人々が集まり、この地域の政治の中心となる。

池上り遺跡群

縄文早期（約9,000年前）にムラができる。

五丹歩遺跡

古墳時代に2軒の家がつくられる。奈良時代に墓地として使われる。

前原遺跡群

旧石器時代（約12,000年前）人が訪れる。

古墳時代の終わりに方墳がつくられる。

奈良時代にムラができる。

上福田和田谷津遺跡

古墳時代に家が2軒つくられる。

※～※はバイパスの範囲

鳥内遺跡

縄文中期・後期にムラができる。

古墳時代から平安時代までときどきムラができ、にぎわう。



埋文アラカルト



大きな五輪塔



小さな五輪塔

古いお寺では、最近の墓石とはちょっと違った立派な石塔をよく見かけます。写真は船橋市西福寺にある五輪塔（県指定有形文化財）です。高さ2.84mの安山岩製の堂々たるもので、鎌倉時代後期に造られたものです。五輪塔は、平安時代の末ころから江戸時代にかけて、供養塔や墓石として武士や僧侶によって立てられました。5個の部材が積み重ねられていますが、上から空（団）・風（半月）・火（三角）・水（円）・地（方）という仏教五大思想の中の宇宙を表しています。

右下の小さな五輪塔は、水晶製のもので高さはわずかに3.1cmしかありません。地・水・火の部分が、一個の水晶を彫り出すことで作られています。中心に穴があり、空・風の部分は別造りで差し込まれていたものと思われます。木更津市笹子城跡の調査で独鈷杵などの仏具とともに発見されました。全国的にも貴重な資料ですが、ほかの例では小さな厨子に納められたり、仏像の胎内に納められたものがあります。城の年代は15世紀後半から16世紀前半で、戦乱の中で武士達が残した資料です。

Q&A

「地中からのメッセージ」第1回最新出土考古資料巡回展 質問から

「新聞で指紋を使って埴輪を研究するという記事を見ましたが、何がわかるのですか。展示されている埴輪にも残っているのですか。」

A 最近始められた研究のひとつに、埴輪の表面に残された指紋をさがし出して、工人のことを明らかにしようという研究があります。犯人をさがし出すために指紋の鑑定を行っているように、指紋はひとりひとり違うことから、ひとつの埴輪に残った指紋を鑑定して、埴輪を作る作業にかかわった人の数や、どのように作業を分担していたのかなど、今までわからなかった点を明らかにしようとするもので、ひとつの古墳に立てられた埴輪全部を調べれば、何人の工人が埴輪造りにたずさわったのかを明らかにできるかもしれません。この研究はまだ始まったばかりですが、今後の研究成果がおおいに期待されています。

展示品の小川崎台遺跡の埴輪にも指紋は残っていますが、写真（小川崎台遺跡出土の別の埴輪）のように全体がはっきり残っているものはごく一部です。



地中からのメッセージ

第一回最新出土考古資料巡回展

●会場

千葉県立房総風土記の丘
平成九年一月十一日～二月十一日